山形大学歴史・地理・人類学論集，第５号，43－55，2004年

自国の歴史とどう向き合うか ― 現代ロシア社会の一断面 ―
On the Current Situation of Historical Science in Russia

淺　野　　明
ASANO, Akira

キーワード：サハロフ（サーハロフ），A. H.，ロシア史，大祖国戦争
Keywords：Сахаров A. H., Русская история, Великая Отечественная Вайна

本稿は、二編の翻訳からなる。最初の一編は、ロシアにおける歴史学の現状に関して注釈を試みたもの、あとの一編は、ロシアの青少年の戦争についての知識と意識を探ろうとしたもので、いずれもロシア（モスクワ）の新聞に掲載されたインタビュー記事の全訳である。一見すると、二つの記事に共通性はほとんどないように見えるかもしれない。しかし、歴史研究に関心を持つ者にとって、二つの記事は、お互いに無関係ではない。なぜなら、これらはいずれも、結局のところ、自国の歴史をどのように捉えるべきかという、かなり本質的な問題を扱っているからである。最初の記事では、歴史研究の専門家が、まさに正面からこの問題を取りあげているが、その内容は決して専門家を対象としたものではなく、幅広い国民に、歴史認識のあり方、そしてロシアの歴史学の現状を理解してもらうことを目的とした、具体的でわかりやすいものになっている。また、あとの記事は、当初から1941-45年のいわゆる大祖国戦争に話が限定されており、歴史研究の専門家ではない人びとの、具体的で率直な歴史認識が語られているという意味で、やはり興味深い。言い換えると、これらの記事は、幾人かのロシア国民の生の声を通して、歴史研究あるいは歴史認識のあり方という面から、現代ロシア社会の一つの断面に光をあてるものであるとも言えよう。

Ⅰ．ロシアにおける歴史学の現状について　― A. H. サーハロフ氏が語る ―

以下に訳出したのは、ロシア科学アカデミー・ロシア史研究所所長アンドレイ・ニコラーエヴィチ・サーハロフ氏に対する、記者の署名入りのインタビュー記事で、2002年11月22日付の学術団体週刊紙『探求』47－48号(通巻705－706号)に掲載されたものである。[1] サーハロフ氏は、キエフ・ルーシの時代から20世紀にいたるまで、ロシア史に関する多数の研究書の著者として、また編者として、わが国でもよく知られている。[2]「権威ある意見」と題されたこのコラムは、小さな活字で、１面全部を同氏に対するインタビューで埋めている。

1991年12月のソ連邦解体から10年以上が経ち、歴史学の状況も大きく変化した。この記事の意義は、ロシア連邦における歴史学の

現状について、ロシア史研究所の所長という半ば公的な立場にいるサーハロフ氏が語っているというところにあろう。氏は、ロシアの歴史学が長年権力に奉仕させられ、その結果、歴史の認識が大きくゆがめられてきたことを率直に認め、客観的な歴史認識の重要性と、現在では研究者たちがそのための方法を身につけ、着実に成果をあげつつあることを、わかりやすい例をあげながら、粘り強く語っている。そのさい、革命前の歴史家たちの業績に学ぶことの重要性を繰り返し述べていることにも、注意しておく価値があろう。本来であれば、訳出にあたって、サーハロフ氏の発言について詳細な注釈を付すべきところであるが、氏は幾人もの歴史上の人物に言及しており、その論点も多岐にわたっている。しかも一方で、これらの人物についてはわが国でも比較的よく研究がなされており、これらの事情を考慮すると、浅学の訳者には、この課題を果たすことはとうてい不可能である。したがって、ここでは、インタビュー記事の訳出のみにとどめざるを得なかった。原記事には、サーハロフ氏の近影と、アレクサンドル・ネフスキーを聖人として描いたイコンの写真が挿入された、エイゼンシュテインの映画『アレクサンドル・ネフスキー』からの１場面（戦いを前に、氷上に隊列を組んだルーシの兵士たちの場面）が大きく掲げられている。本稿では、これらの写真はすべて割愛したが、73頁にサーハロフ氏の写真を掲載した（写真１）。なお、本文中の（　）内は、訳者による補足である。

★　★　★

権威ある意見

歪曲の環境で、*歴史家たちは長いあいだ、自分の国の英雄たちを客観的に評価することができなかった。今日、かれらにはそのための条件が整っている。*

ロシア史研究所所長で、ロシア科学アカデミー準会員アンドレイ・サーハロフ氏の執務室の机には、氏がプーチン大統領と２人で納まっている写真がある（両氏が握手を交わしている写真）。写真は、本年（2002年）３月にバイカル湖畔でおこなわれた、プーチン大統領と、基本的には「技術者たち」からなる８人のロシアの学者たちとの、いま風の言い方で言うところの、「ノーネクタイの」会合のさいに撮影された。これらの学者たちのなかでただ１人の人文科学者が、歴史家のアンドレイ・サーハロフ氏であった。

――「わたしが考えていたとおり、大統領は、わが国の科学のもっとも重要な諸特徴に、鋭い問題関心を持っています。」とアンドレイ・ニコラーエヴィチは語る。「歴史研究、とりわけロシアの歴史研究に対する関心も、そのなかに含まれています。大統領が歴史研究の進歩に注目しており、客観的な歴史の知識が、わが国民の精神性の形成を助けてくれると考えていることは疑いありません」。

――そういった期待は、どの程度実現可能なのでしょうか？というのも、若干の研究者の意見によると、わたしたちの歴史は多くの点で捏造されているといいます。

――歴史研究には、二つの位格があるように思います。ひとつは、科学としての位格で、知識の蓄積と社会的な意識の進歩に応じて、

見直され、正確になります。いまひとつは、イデオロギー的な位格です。なにぶんにも、歴史研究はときとして権力に奉仕してきました。ですから、たしかに歪曲と捏造の危険にさらされていました。権力に対するこの従属は、いまなお完全に克服することができずにいます。あなたのご質問は、歴史研究のまさにこの側面に関連しているのだと思います。

わたしは次のように考えています。歴史研究の社会的な使命は、今日では、以前とはまったく異なっているように思えます。歴史研究は、社会の関心を引き起こしている諸問題に、応えられるようになっています。歴史家たちは、膨大で、ますます充実していく豊かな知識の蓄えを手にしていますし、新しい客観的な研究方法を作りあげつつあります。ですから、過去の時代に起こった、イデオロギーに染められた多くの「難題」を解明することができるようになっています。今日では、すでに多くの出来事が、以前とはまったく異なったように論じられており、それは研究者たちの著作だけではなく、教科書にも反映されています。たとえば、農民戦争やプガチョーフ（エメリヤン・イヴァーノヴィチ、1740あるいは1742-75）の人となり、アレクサンドル１世（位1801-25）のようなわたしたちの時代の改革者たちの活動、また、アレクサンドル・ネフスキー（1220-63、ウラジーミル大公位1252-63）のような重要な歴史上の人物が、いまや新たに解明されつつあります。今日では、アレクサンドル・ネフスキーから、イデオロギー化された後光は取り除かれています。たしかに、かれは偉大な軍事指導者でしたし、聖人と認められています。しかし、わたしたちをいつも驚嘆させるその軍事的な勝利のみによって、かれが聖人と認められているわけではありません。ロシアの歴史に対するかれの貢献は、ネヴァ河畔でスウェーデン人を撃滅したことや、ドイツの十字軍騎士たちの急襲を食い止めたこと―これらの偉業を、かれはわずか20歳そこそこで成し遂げたのですが―こういったことに限定されるものではありません。かれは、先見の明のある、賢明かつ機略にとんだ慧眼の政治家で、この時代のもっとも影響力のある外交官でした。アレクサンドル・ネフスキーは、リヴォニア騎士団とリトアニア人の間の矛盾を煽り、かれらを争わせさえして、軍事的手段とは異なった外交手段でロシアの国境を守りました。

その軍事遠征について言えば、かれはしばしば、時をかせごうとして直接の衝突を避け、もっぱら、少ない兵力で敵を抑止することに努めました。その後、適切な時機を待って、打撃を加えたのです。かれは、とくにドイツ人の支配地とフィンランドで、大きな勝利を収めました。ロシア人たちは、フィンランドでは、在地の住民に対する影響力を確保するためにスウェーデン人と戦ったのです。わたしたちは、いつも、恥ずかしいことであるかのように、これらの事実を黙殺していました。どうか、アレクサンドルを、侵略的であったとして非難なさいませんように。というのも、13世紀初めには、これはまったくあたりまえのことだったのですから。ノヴゴロド共和国とそれを支持していたウラジーミル・スーズダリ公国は、ドイツ人、リトアニア人、スウェーデン人と仮借のない戦いをおこなっていたのです。

アレクサンドル・ネフスキーの外交の才は、タタール・モンゴルとの関係にとくにはっき

りと現れました。かれが、ロシアの利益を守るために、長いとはいえないその人生のおよそ４年間を、モンゴルの首都カラコルムとオルダー（キプチャク・ハン国）ですごしたことを知っている人は、今日多くはありません。かれは、バトゥとのあいだに友好的な信頼関係を築くことに成功し、そのおかげで、ルーシ諸国は、かれらの襲撃と侵攻を免れたのです。しかし、直接に、別の形でその代償を支払わねばなりませんでした。ルーシ諸国は、そのなかにはノヴゴロドも入るのですが、モンゴル人に貢税を支払いました。ノヴゴロドは、アレクサンドルの圧力を受けて、ようやく自国の住民の戸口調査に同意しました。一方、人びとがモンゴル人に対する蜂起を起こしたとき、アレクサンドルは、これらの行動を時期尚早とみなして、容赦なく鎮圧しました。しかし、ときが来たとき、かれ自身が反オルダーの運動の首唱者となったのです。

こういったことは、人間としての苦難であると同時に、政治家としての偉大さでもありました。教会は、ロシア人民の闘士アレクサンドル・ネフスキーを列聖しました。かれはまた、わが身の利益を犠牲にして死にました。アレクサンドルは、オルダーで毒殺されたのです。なぜなら、かれが、イランと戦っているオルダー軍を援助するためにルーシの軍隊を派遣するのを拒み、その軍を沿バルト海地域に振り向けたからです。真実はこのようなものでしたが、わたしたちは、数十年にわたってそれを黙殺してきたのです。

20世紀の、戦争前の諸々の出来事についても同じことがいえます。またしても黙殺と作り話で、しかも今日でも、そういったものが少なからず生みだされているのです。若干の歴史家たちは、２人の独裁者、つまりファシズムの独裁者と共産主義の独裁者を比較して、２人を同列に置いています。これはまったくまちがっています。人種理論を唱導していたブルジョア市民社会のドイツと、社会的所有に立脚するソヴェトの、私が名づけたところの人民的全体主義とのあいだには、類似したものは何もありません。世界に影響力を及ぼそうとした戦いで、かれらが、ときに、冷酷さと狡猾さで際立っている同一の方法を採ったということは、別の問題です。しかも、ソヴェトの全体主義体制は、この点ではファシズムを凌いでいました。ヒトラーは、ヨーロッパと世界の新しい秩序を追求し、スターリンは、レーニンとトロツキーの仕事を継承して、世界革命の勝利を追求しました。もっとも、この目的が、かれによって公言されたことはなかったのですが。

初めのうちは、歴史家たちの意見によれば、かれらはお互いにひかれあっていました。ソ連邦とドイツの運命には、何か共通したものがあったのです。両国は、現代的な言い方をすると、劣等感にさいなまれていました。世界によって領土を奪われた両国は、自尊心を傷つけられました。ヴェルサイユ条約で、ドイツは自分の領土を一部奪われ、賠償金を支払いましたが、ヒトラーは、報復を訴えてこれにつけこみました。国内戦以後のロシアは、荒廃と飢餓の状態にあり、国際社会から承認されていませんでした。

両国は、これについてははっきり言わねばなりませんが、最初のうちはお互いに好意を持っていました。近隣諸国を勢力下に置こうとして、２人の独裁者は、ヨーロッパの分割について合意しました。戦争前の両国の類似

点と相違点は、外交戦の手練手管のなかに現れました。結局､「リッベントロープ－モロトフ」協定が作成され、ヨーロッパの分割が取り決められました。ソ連邦は、沿バルト海地域、ベッサラビア、フィンランドについて行動の自由を得ました。しかし、遅かれ早かれ、２人の巨魁は衝突せねばなりませんでした。そしてそれは、1941年に起こりました。スターリンが先に攻撃したがっていたか否かという問題は、わたしの考えでは、真剣な検討に値しません。もし、軍を近代化する時間的余裕があり、そしてもちろんその機会がやってくれば、あるいはスターリンが先に攻撃したかもしれません。でも、問題の本質はそこにはありません。今日、両国関係の歴史の研究に、一部の歴史家が試みているように、新たなイデオロギー的な定型を持ちこむべきではありません。そういう歴史家たちは、２人の独裁者に同一性という烙印を押そうとしているのだと思います。

――では、わが国の、昔の正統的な歴史家たちは、歴史の歪曲と捏造をおこなっていたのですか？

――いいえ、決してそうではありません。カラムジーン（ニコライ・ミハイーロヴィチ、1766-1826)、クリュチェーフスキー（ヴァシーリー・オシーポヴィチ、1841-1911)、ソロヴィヨーフ（セルゲイ・ミハイーロヴィチ、1820-79）は、歴史的なできごとの叙述において、たとえそれがかれらの考えや信念に反するときでさえ、客観的でした。たとえば、カラムジーンは、貴族で自由主義者で、君主制の擁護者でしたが、このことは、かれが「ツァーリ権力」に対してもっとも厳しい批判を加えることを妨げませんでした。例をあげると、イヴァン雷帝のおこないと冷酷さを叙述するとき、かれは、検閲機関の怒りを気遣わねばならないほど大胆でした。しかし、アレクサンドル１世は、かれの著作を読んで、この歴史家の見地に賛同しました。カラムジーンは、ソヴェトの研究者たちと違って、事実上自由に考えを述べることができ、外部からの圧力を感じませんでした。なぜなら、かれの業績は、歴史学に対する極めて重要な貢献であったからです。

ソロヴィヨーフは、なおいっそう独立的でした。そのうえかれは、先達たちよりもずっと多くの事実を解明しました。それで、今日、ソロヴィヨーフの著作はわれわれにとって真の百科事典なのです。かれは、多くの出来事や人物について、概して驚くほど十全に語りました。たとえば、偽ドミートリー１世（位1605-06）について本当のことをお知りになりたければ、ソロヴィヨーフをお読みになってください。

この若者（偽ドミートリー１世）は、学があって、語学の才もあり、当時としては十分に「民主的な」考えと作法を身につけていました。かれは、自由に街を歩き、人びとと言葉を交わし、嘆願書を自ら受け取りました。偽ドミートリーは、何日も会議をおこなっている貴族会議を嘲笑しました。かれは､「そんなこと、しごく簡単だ」と言って、ロシアのわかりの悪い人びとが苦慮していた諸問題を瞬時に解決しました。偽ドミートリーは、ロシアに西方の文化を持ち込もうとしました。かれは、ロシアの商人が自由に外国に出かけることを認め、権利においてすべての信仰を平等にしました。同時に、引き受けた義務については何一つ果たさないで、ポーランド人

を欺きました。かれらに、土地も金貨も与えなかったのです。そればかりか、ロシアの領土を守るために、ポーランドやクリミア・ハン国と戦うための軍隊を整えていました。

このような支配者は、当時のロシアにとっては、まったくありうべからざる人物でした。もしかれが玉座に留まっていたら、国家がどんな方向に発展したか、いまとなってはわかりません。また、かれはポーランドのまわし者だというだけで殺害されたのではありません。偽ドミートリーの考え方は、貴族、書記官、聖職者たちにはまったく無縁であったのです。かれらは偽ドミートリーを受け入れず、あらゆる手を使って、公然とかれを中傷しようとしました。そして、それを実行するのは簡単でした。かれの妻はカトリックでしたし、警護隊は西ヨーロッパの傭兵からなっており、最初のうちは同盟者であるポーランド人に頼っていたからです。残念ながら、わが国の歴史家たちは、こういった人びとの観点に立脚してしまいました。ソロヴィヨーフこそが、偽ドミートリーについて真実を叙述した最初の人びとの１人であって、それが、いま、わたしたちの教科書にも反映されているのです。

偽ドミートリーと…ストルイピン（首相1906-11）のあいだには、どことなく微妙に類似したものがあります。かれらの運命には、何か共通したものがあるのです。かれらの場合も、歴史学は、等しく、その姿を歪曲して描いてきました。今日、ようやくわたしたちは、文字どおりすべての人びとがストルイピンの改革に反対していたことを理解し始めています。ツァーリも、右翼も左翼も、保守主義者も自由主義者も、みんなです。ある人びとは、すべてが以前と同じように、そのままであって欲しいと願い、他の人びとは、ロシアを革命に引き込もうと試みていました。ストルイピンこそ、土地に対する地主の権利を一挙に根絶してしまうことはできないということを理解していて、農民から自由な経営主、つまり土地所有者を作り出そうと意図しました。かれは工業と地方自治制度の改革、陸軍と海軍の近代化を志しました…。ストルイピンは、国家を前進させようとしました。当時これは、繰り返して言いますが、誰にも必要ではなかったのです。

――西側諸国でも、歴史研究はやはりごまかしにさらされているのでしょうか。

――もちろんです。外国にも、歴史研究を自分の婢にしてしまおうとする勢力があります。たとえば、アメリカの教科書を開いてみるだけで十分です。そこには、まさしくイデオロギー的な定型があります。「アメリカが一番だ」とか、国旗をあがめるとかいうのはいいでしょう。しかし、他の世界の歴史を貶めるのはいけません！アメリカの著者たちは、自国の革命を完璧かつ鮮やかに描写しており、それを崇拝の域にまで高めています。一方、わが国の革命を、人びとの置かれていた状態や、ロシア社会で起こっていた内奥の過程を無視して、もっぱら狂信者たちの陰謀として叙述しています。アメリカの教科書に書かれている多くの事実を、吟味することもなく、かれらが叙述しているままに、完全に信頼することができるとは、わたしには思えません[3)]。

かつて、あるアメリカの出版社を訪ねたとき、わたしは編集者に言いました。「あなたがたの教科書は、一つの宣伝の型に従って構成されている」とね。そしてかれに尋ねました。「それで、あなた方は、お定まりの図式とは異

なっている教科書を出版できるのでしょうか？」 編集者は、微苦笑して言いました。「もちろん、できますよ。…でも、われわれは即座に職を追われるでしょうね」。

――では、わが国で、事実が十全にして客観的に叙述された教科書を書くことは可能でしょうか？また、それは誰が成し遂げるのでしょうか？

――現在では、誰も歴史家を監督したり、規制したりすることはありません。わたしたちは自由です。言うまでもなく、これは、わが国にとってだけではなく、世界全体にとっても素晴らしいことです。いまでは自由だ、ということを心に留めておきましょう。問題は、別のところにあります。つまり、与えられた機会を、わたしたちが利用できるかどうか、ということです。ここでは、答えはすでにそれほど単純明快ではありません。というのも、わたしたちは皆、古い体系で育てられてきたからです。ある人は以前と同じ立場に留まっており、また別の人の場合には、立場は変わりつつありますが、でもゆっくりとです。そして、他の人びとは、はるかかなたに行ってしまいました。そしてそこには、非難されるべきことは何もありません。わたしたちには、皆それぞれに、自分の考え、自分の経験、自分の社会的価値というものがあります。ですから、研究者も、歴史的な出来事を、同じように客観的に評価することはできません。ある人が、それらの事実に対して一つの見解を示せば、他の人は別の見解を示します。それとともに、ゆっくりと、しかし確実に、祖国史についても、世界史についても、事実と史料に対する忠実な姿勢に基礎づけられた、真に科学的で客観的な接近方法が、おのずとその道を切り開いていきます。

わが国の教科書の大部分は共著です。ですから、著者たちのあいだに一致した立場、叙述されている出来事に対する共通の接近方法があるべきだ、ということが非常に重要です。そのときに、諸々の教科書が、一つの精神で貫かれるでしょう。あるいは、今日でも、教科書はまだ理想からは遠いかもしれません。しかし、今日の教科書を、少し前の、15-20年ほど前に書かれたものと比べてみれば、その相違は大きなものです。わたしたちの科学が、いかに前進したかは明らかです。

もちろん、それは外部からの影響にさらされていますし、他のいずれの学問分野とも同じく、その接近方法も見なおされています。たとえば、ほんの数十年前には、わたしたちは多くの物理現象を、今日とはまったく別の方法で理解していました。でも、いまでは古い定説はまったく否定されるか、あるいは変化を被りました。歴史研究もまた、他のいずれの学問領域とも、同じ状況にあります。それには独自の法則があり、他の学問領域とまったく同様に、事実の蓄積の程度に応じて変化します。ですから、一部の「旧習」の擁護者が考えているように、あたかも歴史が書きかえられているかのように言うことはできません。そうではなく、歴史研究は進歩しているのです。21世紀の高さから、わたしたちは多くの出来事をまったく異なったように眺め、それらを異なったように理解します。なぜなら、科学だけが変わっているのではなく、わたしたち自身もまた変わっているのですから。

ユーリー・ドリーゼ

註

1）《Поиск》№47－48（705－706）. 22ноябр я 2002 г.

2）同氏の著作は、次の２冊が邦訳されている。A. H.サハロフ/上甲太郎・大塚寿一訳『進歩・平和共存および知的自由』（みすず書房、1969年）、同/米内哲雄訳『ステンカ・ラージン伝：ロシヤ革命の序曲　17世紀の記録』（たくみ書房、1980年）

3）ここでサーハロフ氏が鋭く指摘していたアメリカの歴史教科書のはなはだしい問題性とその政治的・社会的背景については、次の翻訳によってわれわれも容易に知りうるようになった。ジェームズ・W・ローウェン/富田虎男監訳『アメリカの歴史教科書問題― 先生が教えた嘘 ―』（明石書店、2003年）

Ⅱ．ロシアの若者たちにとっての戦争

ここに訳出したのは、モスクワの南西行政管区で、無料で配布されている週刊の行政情報紙の2003年５月８－14日号に掲載されたアンケート調査記事の全訳である。[1] このときの同紙は、ロシア連邦の重要な祝日である５月９日の「勝利の日（戦勝記念日）」にあわせて、大祖国戦争関連の記事をいくつか掲載した。そのなかで、「電撃アンケート」と題されたこのコラムは、この戦争について若者に質問して、その意識を探ろうと試みた、とりわけ興味深いものであった。

この記事を読んだ印象は、読者によってもちろんいろいろであろう。前掲のインタビューで、サーハロフ氏は、過去のイデオロギーの呪縛から解放されて、いまや歴史研究は、正確な知識と客観的な研究方法によって、社会的な関心に応えられるようになっていると語っていた。基本的な方向性としては、それは真実であろう。だがこの記事の内容は、いまの歴史研究が、現実の社会と十分な接点を持ちえているのかどうかを疑わせるものでもある。ただ、若者の歴史的な知識の欠如は、他の国ぐにでもよく見られる現象であって、決してロシアに特有のものではない。また、過去の戦争に対する具体的な知識が乏しいからといって、ただちに、戦争に対する若者たちの意識の低さを問題にするのは適切でないかもしれない。本当に重要なことは、知識を得ることそれ自体ではなく、戦争の本質について深く考えをめぐらすことだからである。われわれは、この記事から、それぞれの若者の知識の多寡ではなく、各々の発言全体から浮かびあがってくる、その発想、思考方法の特徴をこそ読み取るべきであろう。

ただ、それにしても、ナチス・ドイツとの戦いの主戦場となり、２千万以上の人びとが命を落としただけでなく、生き残った人びともこのうえなく悲惨な体験を強いられたそのロシアにおいてすら、いまやこのような状況になりつつあるという事実は、戦争体験を語り継ぐということがいかに難しいか、ということを如実に示しているといえよう。というよりも、とりわけつらく悲惨な体験をした人びとほど、その体験を語りたがらないという現実に、戦争の持っている底知れぬ非人間性をみるべきなのだろう。訳者にとっては、チェチェン人の青年が戦争について詳細な知識を持っているのに対し、ロシア人青少年の知識がいかにもあいまいで心もとないのが印象的であった。まったくの偶然でないとすれば、自らの生き方、あるいはアイデンティティについて、その確認を日常的に求められているかどうか、ということが、この相違を生み出している主要な原因であるように思われる。祖国を遠く離れてモスクワで生きる道を選ん

だ人びとが、自分の人生をかけることになる国の歴史について、よく知ろうとするのは自然なことだからである。さらに付け加えれば、筆者には、記事の末尾に掲げられている記者の結語の、その最後の一言がひどく痛々しく感じられた。さて、ひるがえって、わが国の若者たちは、戦争について何を知っていて、どう思っているのであろうか。そして、歴史研究は、若者たちと十分な接点を持ちえているのであろうか[2)]。

なお、もとの記事では、それぞれの発言の傍らに、本人の写真が掲げられていた。小さく、一見何の変哲もないものであるが、訳者にはこれらの写真がとても印象深かった。本稿では、それらの写真に番号を付して、本稿の最後に一括して掲げた。各番号は、若者たちの氏名の前に付した番号に一致している。

★　★　★

電撃アンケート

若者たちは戦争について何を知っているか…

わたしは1945年にドイツの都市マグデブルクで生まれました。父は歩兵大尉、母は軍医で同じく大尉でした。わたしにとって、人生の始まりは、すなわち大祖国戦争の終わりだったのです。それで、戦争に関する多くの事柄が、わたしにとって大切で、親しみがあり、理解でき、そして既知のことでした。本当に関心を持って編集の課題に取りかかったのは、こういう理由からです。その課題とは、現在30歳以下の人たちに、あの戦争について何を知っていて、またどう思っているのかを質問する、というものです。

1．アレクセイ・ベロゼールツェフ：運転手

――わたしのところでは、祖父が従軍しました。アレクセイ・イヴァノーヴィチといいました。その祖父はもう死にました。以前に、78年にね。兵卒として戦ったということは知っていますが、どこで、どんなふうに戦ったかは知りません。わたしは、祖父が亡くなったとき５歳ぐらいでしたし、祖父の戦歴について、家族のなかでとくに思い起こすこともありませんでしたね…。ああ、そうだ！祖父は前線の運転手だったんですよ！まちがいありません！祖父にはお気に入りの歌がありました。こういうのです：《ああ、道よ、前線の小道よ、どんな爆撃も俺たちは怖くない、でも死ぬにはちょっと早すぎる、俺たちにはまだ故郷に仕事があるから…》。わたし自身は、ハンドルを握りながらこの歌を口ずさむんです。効果的で、気分を高揚させてくれるんですよ。ちなみに、わたしは軍隊でも運転手だったんです。防空隊でね。ベラルーシです。ですから、もしかすると、わたしと祖父は同じ道路を走っていたかもしれないんです。どうやら祖父もベラルーシで戦っていたらしいので…。

2．ナターシャ・タラカーノヴァ：16歳　第199職業専修学校生徒

――わたしたちのところで誰が従軍したのか、知りません。祖父は死にました。祖母はまだ健在ですが、昔のことを思い出したがりません。戦争中、わたしたちの国で誰が指導者だったかですか？知りません。スターリン、ですか？やっぱりスターリンですね。ドイツの側ですか？たぶんヒトラーです。アメリカ人が誰の側に立って戦ったかですか？きっとヒトラーの側でしょう？ちがうんですか？でも日

本人についてなら知っています。かれらはまちがいなく、ヒトラーの側に立って戦いました。どこで戦争が終わったかですか？ドイツで…。いま、友達が教えてくれています―ベルリンです。ええ、５月９日については知っています。勝利の日です。いま､秘書･コンサルタントになる勉強をしています。ママと２人暮しです。ママは工場で働いています。パパはいません。

３．サイード・インデルバエフ：18歳　モスクワ財政－経済アカデミー法学部学生

――あの戦争については、何でも知っています。1941年６月22日に始まりました。われわれの側の同盟者は、アメリカ人と英国人…。最高司令官はスターリンで、かれには優秀な司令官たちがいました。ジューコフ、コーネフ、ロコソーフスキー…[3]。わたしのところでは、祖父が従軍しました。ブレスト要塞で負傷しましたが、それでも祖父は包囲網を脱出しました。祖父は勲章とメダルを持っています。戦争中、祖父は大尉にまで昇進しました。いま､祖国で元気にしています。チェチェンのシャリンスキー地区、ノーヴィエ・アタギ村です｡わたしたちは1993年からモスクワに住んでいます。ここでは、パパが、ラムザナという名前ですが、自分の会社を持っています。ママは、ゾヤといいますが、主婦です。

４.タチヤーナ･ショーミナ：28歳　縫製合同企業｢モスクワ｣西部行政管区試作工場長

――わたしの祖母アンナ・ペトローヴナは、神様のおかげで、元気にしています。いま75歳です。戦争中、祖母はわたしたちの工場で働いていました。技術管理部の検査員から始めて、職長で職を終えました…。年金生活に入ってからもここで働いていました。ほんの２カ月前に、工場から完全に離れました。祖母は、あの、年長の、がまん強い世代の人間です。祖母は話してくれました。戦争中の生活がどんなに困難だったか、いかに食べ物がなかったか、モスクワがどんなふうに爆撃されたか…。そして、勝利が、いかに国民みんなの喜びだったかを！祖母はいまでも５月９日には泣くんです。この日は、目に涙を浮かべて迎える日です。まさに歌に歌われているとおりです…[4]。ママも工場で、織物の決済係として働いていますし、パパもそこで働いていました。電気技師でした。つい最近、別の企業に移りました。わたしたちみんなにとって、５月９日は聖なる日です。そして工場は、わたしたちにとって、肉親みたいなものです。

５．セルゲイ・イサチェーンコフ：23歳　建設労働者

――通信教育で、研究所で学んでいます。建築現場で働くのは、気に入っています。これは男の仕事ですよ…。さて、わたしのところの年寄りたち、祖父も祖母も、戦争には行きませんでした。祖母、エカチェリーナ・イヴァーノヴナは戦争中、まだまったく幼いときに、ドイツに連行されました。ベラルーシに住んでいて、占領の憂き目にあったんです。ドイツでは、ドイツ人のために苦労して働き、辛酸をなめました…。かれらの収容所は、わが軍によって解放されました。祖母は、終生ドイツ人を嫌っていましたし、ドイツ語を聞くこともがまんできませんでした。わが国の捕虜や囚人の収容所の映像が流されると、テ

レビのスイッチまで切ってしまいました…。ですから、戦争についてわたしに質問しないでください。正直なところ、戦争についてたいしたことは知らないんです。戦争がいつ始まって、いつ終わったかは知っています。でもそれ以上は、たぶん知る必要もないでしょう。それは昔のことですし、祖母がどんなに辛い目にあったかということを思い起こすことに、意味があるのでしょうか？

6．ナターリヤ・イサーエヴァ：27歳　エコノミスト

――わたしはオデッサの出身です。数年前にモスクワっ子になりました。でも祖母のエレーナ・シードロヴナは、いまもオデッサに住んでいます。93歳なんですよ！祖母から、祖父のニコライ・ヤーコヴレヴィチのことを聞いています。祖父は戦車兵だったんです。祖父がどこで、どんなふうに戦ったかですか？知りません。もちろん、恥ずかしいですね。祖母に聞かなくては。祖父のメダル「勇武賞」は家族で保管しています。それから、祖母は、オデッサ防衛について、病院でわが軍の負傷兵の洗濯物を洗ってやったことについて、話してくれました。オデッサの防衛がいつだったか、ですか？1941-42年だったかしら？それとも、1943年だったかも…覚えていません。[5] ほら、息子が生まれたんですよ。ヴァレロチカ、５カ月です。息子には兵士になって欲しくないし、戦争に行って欲しくもありません。息子には、大きな戦争にも、小さな戦争にも関わることがないようにと願っています。大きくなったら何になるのかですって？パパと同じようにさせます。法律家です！

7．アルテム・アフォーンスキー：第45ギムナジウム生徒　７年生

――戦争がいつ始まったか？1942年です。ちがう？あれ、まちがったかな。ドイツの首都については知っています。ベルリンです。スターリンとヒトラーについても知っています。それからジューコフについても。かれの記念像が、赤の広場と隣り合って立っています。そこでは、かれは馬に乗っています。かれは、あの戦争でもっとも重要な将軍でした。軍司令官でほかに誰を覚えているか？ウーン…覚えていません。スターリングラードとクルスクの戦い？[6] それについては、映画を見たような気がします。レニングラード封鎖？[7] いいえ、知りません。歴史については、僕たちはいま、ようやく中世の時代を習っているところなんです…。

8．ミーシャ・ダマースキン：第520中学校生徒　２年生

――曽祖父は死にました。曾祖母は元気にしています。いいえ、曾祖母は戦争について話すことはありませんでした。戦争については、僕はテレビで見るのが好きです。アメリカ兵がイラクで戦っているのをね。それから、僕たちはチェチェンで戦争をしています。ところで、あなたはどの戦争について質問しているの？

記者から

かくの如しです、読者の皆さん！もちろん、いくつかの答えを聞いて悲しくなります。こういう子どもたちがいるということについて、わたしたちに責任があるのでしょうか、それともないのでしょうか？この質問に答えるの

は簡単ではありません。時代がちがうのです。そしてわたしたちもみんな、変わってしまいました。

ユーリー・ゴヴォルーヒン

写真：オレガ・キリューシキナ

註

1）《За Калужской заставой》№.17［304］8－14 мая 2003г. この新聞は、モスクワ市の「南西行政管区管区新聞」総局によって1997年から発行されている公的な情報紙で、発行部数は公称31万6千200部である。

2）サーハロフ氏の発言と本記事を一読して、現代歴史学の意義についていま一度考え直してみたいという向きには、エリック・ホブズボーム/原剛訳『ホブズボーム歴史論』(ミネルヴァ書房、2001年）所収の諸論考、とりわけ「歴史学は進歩したか？」、「アイデンティティの歴史だけでは不十分」等をご覧いただきたい。

3）Г.К. ジューコフ（1896－1974）：1939年のハルハ川戦争（ノモンハン事件）で関東軍と戦い、ソ連に勝利をもたらす。大祖国戦争開戦時には参謀総長。1942年8月に最高司令官代理に就任。戦争を勝利に導いた功労者として、多くの人びとの尊敬を集めている。И.С.コーネフ（1897－1973）：モスクワ防衛戦、クルスクの戦い等に参加し、ウクライナの解放に功績をあげる。ジューコフとともに、ベルリン攻防戦にも参加した。К.К. ロコソーフスキー（1896-1968）：国内戦時に、革命軍側の将校として各地を転戦。師団長に昇進していた1937年に逮捕され、3年間の収容所生活を送るが、その後軍団長として軍務に復帰。モスクワ防衛戦、スターリングラードの戦い、クルスクの戦い等に司令官の1人として参加した。

4）有名な歌「勝利の日」に、「この喜び、目に涙を浮かべて」という一節がある。

5）オデッサ防衛戦：1941年8月5日－10月16日。

6）クルスクの戦い：1943年7月5日－8月23日。この戦いは、これ以後ドイツ軍が一度も攻勢に転じることができなかったという意味で、大祖国戦争の大きな転換点であった。2003年は、そのクルスクの戦いの60周年に当たっていた。ちなみに、新聞《За Калужской заставой》は、このときも特集を組んだ。

7）レニングラード封鎖：1941年9月8日－1944年1月27日。ドイツ軍によって包囲されたレニングラードは、約3年間、あらゆる補給物資を絶たれた状態で、激しい攻撃にさらされた。戦闘と飢餓により、軍人150万人、市民の3人に1人が亡くなったといわれる。この悲惨な3年間については、すぐれた記録がある。アレーシ・アダーモビチ、ダニール・グラーニン/宮下トモ子ほか訳『ドキュメント封鎖・飢餓・人間―1941→1944年のレニングラード―上・下』(新時代社、1986年)。なお、2004年1月27日は、封鎖解除60周年に当たっていた。

1

2

3

4

5

6

7

8